

氏名（本籍）	たつ み やす たか 辰見康剛（兵庫県）
学位の種類	博士（スポーツ科学）
学位記番号	甲第39号
学位授与日	令和3（2021）年9月15日
学位授与の要件	大阪体育大学大学院学位規程第4条第1項該当
研究科名	スポーツ科学研究科（博士後期課程）スポーツ科学専攻
論文題目	ラグビーチームにおける集合的効力感と集団凝集性：試合の出場機会および異なる教育段階と将来の勝敗との関連
審査委員	主査 教授 土屋 裕 睦 副査 教授 富山 浩 三 教授 藤本 淳 也

論文内容の要旨

本研究の目的は、競技レベルの高いラグビーチームにおける集合的効力感と集団凝集性について、試合の出場機会、教育段階、および調査直後の勝敗から検討することであった。提出論文では、集合的効力感と、集団凝集性について、先行研究での知見や構成概念について整理がなされた後、研究目的に対応して以下の3つの研究が実施された。

まず研究1では、全国大会上位入賞経験のある高校ラグビー部に所属する59名の選手を対象に、縦断的調査を行った。その結果、集合的効力感ならびに集団凝集性得点ともに、出場機会を得ている方が高い値を示した。また、集合的効力感についてはプレシーズンからインシーズンにかけて高まり、インシーズンに限っては、出場機会を得ていることでより得点の高まることが明らかとなった。以上から、出場機会の有無によって集合的効力感ならびに集団凝集性得点に変化すること、その変化はプレシーズンからインシーズンといったチーム状況に影響を受けることが明らかになった。

研究2では、教育段階による差を検討するため、全国トップレベルにある高校生322名と大学生

444名（各5チーム）を対象として質問紙調査を行った。その結果、集合的効力感においては大学生より高校生の方が高い値を示し、特に高校生の出場機会を得ているメンバーに高い値がみられた。このことから、集合的効力感における教育段階の差は出場機会を得ているか否かによって、より顕著に表れることが明らかとなった。一方、集団凝集性においては出場機会に関わらず、大学生より高校生の方が常に高い値を示した。以上から、出場機会による差は、高校と大学といった教育段階の違いによって生じることが確認された。

研究3では、目標とした試合における勝敗によって、その直前のチームにおける集合的効力感と集団凝集性に違いが認められるかどうかについて検討した。高校生530名と大学生820名（各9チーム）を対象とし、集合的効力感および集団凝集性について調査を行った後、その直後の試合における勝敗との関連を検討した。その結果、目標とした試合で勝利した高校生チームにおいて、出場機会を得ているメンバーに限り、集合的効力感が高かったことが分かった。一方、集団凝集性については高校生と大学生ともに次の試合の勝敗との関連は示されなかった。

以上、高校並びに大学における競技力の高いラグビーチームに対する3つの実証研究から得られた結果について、総合考察を行い、以下の結論を得た。

①質問紙を用いた縦断的調査の結果から、集合的効力感と集団凝集性はチームの状態を示す心理指標であり、プレシーズンからインシーズンにかけて変化しうるものであり、また出場機会の有無によって同じチームに所属していても両指標に対するチームメンバーの評価は変わりうるものである。②競技力の高い高校生と大学生のラグビーチームを比較した場合、集合的効力感および集団凝集性のいずれも高校生の方が高く、また集合的効力感については出場機会を得ている高校生の得点の高いことが示された。そこには、発育発達差、自己効力感、運動部活動の位置づけ、指導者の関わり方といった高校・大学の教育段階の違いが影響していることが示唆された。③集合的効力感および集団凝集性と、目標とした試合での勝敗との関連を検討した結果、集団凝集性は試合の勝敗と関連が見られなかったが、高校生の出場機会を得ているメンバーにおいては、集合的効力感と勝敗との間に関連が認められた。いずれも、勝敗の拮抗したチーム間での調査結果であり、集合的効力感を高めるようなチーム作りが重要であると示唆された。

審査結果の要旨

（論文審査）

提出論文をもとに、本学が定める博士論文審査基準8項目に基づき、論文審査を行った。まず、審査基準①研究の目的・課題の明確性について、本研究では集合的効力感ならびに集団凝集性に関する国内研究41件、国外研究37件を網羅的に検討しており、そこから出場機会や教育段階の違いを検討する必要のあることなどを指摘しており、専門領域における問題意識が明確で、研究の学術的または実践的意義が示されていることから、審査基準①について研究の目的・課題は明確であると確認した。

続いて、審査基準②研究方法の妥当性については、心理尺度選定の理由や信頼性・妥当性の検討を行っ

ており、研究課題を達成するために、適切な調査尺度を、適切な時期に、適切な対象者に対して実施しており、これらの調査から得られた結果を先行研究の知見に照らして考察を行なっていることから、この基準を満たしていることを確認した。

審査基準③研究の信頼性については、研究の信頼性を担保するために適切なデータを収集・管理しており、それぞれの構成論文の学術雑誌への掲載に際しても倫理的な手続きについて認められていることから、基準を満たしていることを確認した。

審査基準④論旨の一貫性については、本研究で扱っている集合的効力感および集団凝集性が状態的な概念であることを念頭にその論旨が明確かつ一貫しており、これらの心理尺度の変化を、出場機会、教育段階、将来の勝敗と研究課題に沿って論述していることから、基準を満たしていることを確認した。

審査基準⑤研究成果の意義については、対象ならびに複数の条件を設定した上で、異なる教育段階や次の試合における勝敗と集合的効力感および集団凝集性との関連を検討した研究は今まで実施されておらず、実践現場への示唆も明確に記述されていることから、本研究における成果の意義が確認された。

審査基準⑥研究の独創性については、高校生および大学生において、それぞれ実力が拮抗したチーム同士の公式戦期間において調査を行うなど、研究方法にも新規性があり、競技スポーツチームを対象に将来の勝敗と集合的効力感および集団凝集性との関連を検討した点は高い独創性があると考えられた。また、この点が評価され令和2年度の日本コーチング学会学会賞を受賞していることから、本学の基準を満たしていると考えられた。

審査基準⑦論文の体裁についてはAPAフォーマットに準じており、スポーツ心理学領域に求められる学術論文としての体裁が整っており、また⑧研究遂行のために必要な態度・資質についても、博士論文発表会における発表と質疑に対する応答が、論理的かつ明快であり、国内外における研究発表や招待講演を行っていることから、本学の基準を満たしていることを確認した。

(最終試験)

上記に関連する事柄および博士論文発表会での質疑に対する応答の内容を中心に、口頭試問を行った。具体的には、①研究1の位置づけおよび集合的効力感ならびに集団凝集性の概念や理論的背景の整理、②出場機会、教育段階といった用語の定義、③集合的効力感が高いチームが勝利する可能性の高いことの考察、等を中心に質問した。

その結果、①については、研究1において1つのチームを縦断的に調査することで、集合的効力感ならびに集団凝集性の動態（時期による違い、出場機会の有無による違い）が理解できたこと、また集合的効力感ならびに集団凝集性はチームワークについて心理学的に研究する際の堅固な理論である一方、それが特性的なものではなく状態として捉えられるものであることを実証できた点で、本研究は意義があると説明された。続いて、②については出場機会とチーム内の地位（レギュラー・非レギュラー）との違いが説明され、教育段階には発育発達差、運動部活動の位置づけ、指導者要因が包含されていることを踏まえた定義づけがされていることについて説明があった。また③については、集合的効力感の下位尺度には、「能力」以外に持続性、準備、まとめ（結束力）、努力等の側面があり、単に勝敗に対する客観的な予測ではなく「チームで共有される（主観的な）信念」であること、そのため準備や努力に焦点を当てた

チーム作りにより，不利な対戦相手においても集合的効力感は高めることができ，それがパフォーマンス発揮につながる可能性のあることについて説明があった。

いずれの質問にも的確な回答があり，提出された論文においても発表会および口頭試問における質疑を反映して適切に修正がなされていることを確認した。また研究の限界と今後の課題を含め，関連する事項についても十分な回答がなされた。以上から，本学が定める博士の学位授与の基準8項目を満たしており，習得した知識と技能が博士の学位にふさわしいと判断されたので，合格と判定した。